

いばきた

デザイン  
プロジェクト

IBA-KITA  
DESIGN  
PROJECT



茨木市

茨木市 都市整備部 北部整備推進課

〒567-8505 茨木市駅前三丁目8-13

電話：072 (620) 1609

ファックス：072 (620) 1730

メール：hokubuseibi@city.ibaraki.lg.jp



次なる  
茨木へ。

2020/4 — 2021/3

茨木市北部地域・旧石河村 編



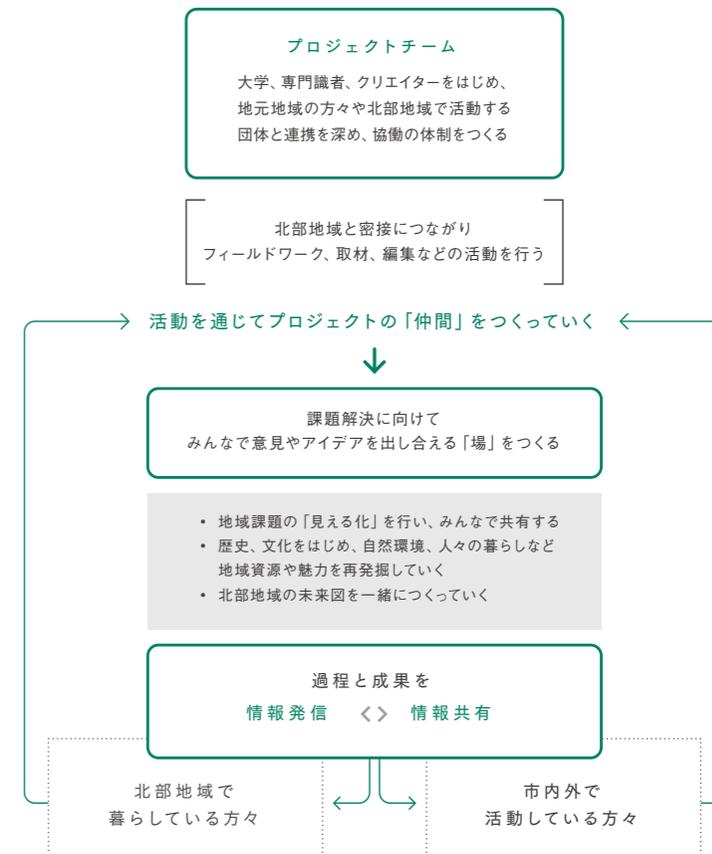
## 茨木市北部地域の 課題解決を目指して。

茨木市は、大阪市や京都市へアクセスしやすく、大学・高校をはじめとする教育機関、ショッピングモール、商店街、飲食店などの商業施設も充実していることから、関西圏の中でも「住みよいまち」「利便性の高いベッドタウン」として評価が高く、茨木市全体の人口推移は毎年増加傾向にあります。一方、北部山間地では、若者を中心とする人口流出と農林業従事者の高齢化により、産業や環境保全の停滞が続いています。特に問題となっているのが、山間地の「深刻な過疎化」です。茨木市の全面積の約半分が山間地にあたりますが、市街地の人口に対して約1%という統計もあります。

このような課題解決に向けて、地元で暮らしているの方々をはじめ、市内外のさまざまな人たちが北部地域に関心を持ち、みんなで考え、一緒に取り組んでいくことができるフィールドを創出するため、平成30～令和2年度の3年間を実践期間として取り組んできたのが、いばきたデザインプロジェクトです。来年度以降は、このプロジェクトで培った地域との関係性を基盤に、より発展的な取り組みを行っていきます。



課題解決に向けた「仕組み」をデザインする。



茨木市北部地域は、地元の人たちから親しみを込めて「山三」と呼ばれています。

1889年(明治22年)に施行された町村制により、鳥下郡の大岩村・安元村・生保村・大門寺村・桑原村を「石河村」。下音羽村・上音羽村・銭原村・長谷村・清阪(現在は清阪)村・車作村・忍頂寺村を「見山村」。泉原村・千提寺村・高山村・佐保村を「清溪村」として発足し、旧村域は大字となった。1896年(明治29年)には所属郡が三島郡となり、その後、1955年(昭和30年)に茨木市へ編入。同時に三島郡 石河村・見山村・清溪村は廃止されました(その際に清溪村の大字高山が豊能郡東能勢村=現豊能町に編入)。地元の方たちは、現在もこの旧石河村・旧見山村・旧清溪村の3つの旧村域で区分をし、親しみを込めて「山三」と総称しています。いばきたデザインプロジェクトでは、2018～2020年度の3年間をかけて1年間で1旧村域を対象に、「山三」をフィールドにした、さまざまな取り組みを推進させていきます。

いばきたデザインプロジェクトは、2018～2020年度の3年間を実践期間としており、期末ごとに冊子を発行します。本冊子は2020年度版にあたり、旧石河村地域を対象とした活動の過程や成果を活動順に編集したものです。

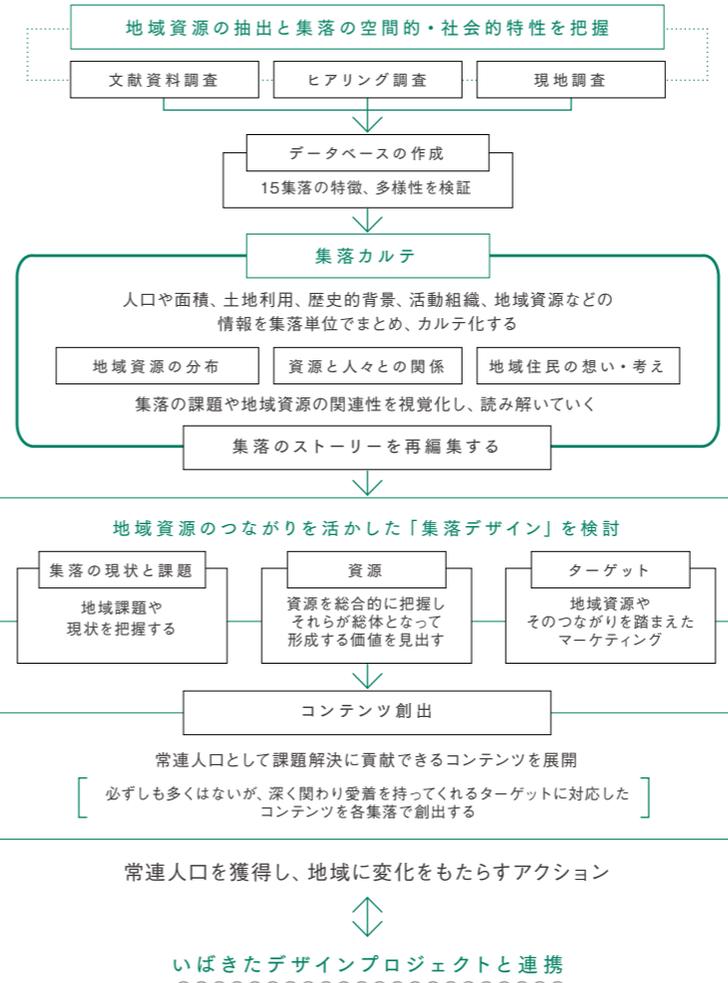


## 大阪大学大学院 工学研究科の学生と、一緒になって取り組むプロジェクト。

いばきたデザインプロジェクトでは、大阪大学大学院工学研究科 環境エネルギー工学専攻都市環境デザイン学領域の学生と連携を図り、地域資源や魅力の掘り起こしをはじめ、地域の空間的・社会的な特性を把握するためのデータベースづくり、地元の方々の協力によるフィールドワークなどを継続的に行っています。活動を通じて得られた情報は「集落カルテ」にアップデートし、課題解決に向けての方法を導くための情報ツールとして活用していきます。



### 大阪大学大学院 工学研究科の学生による取組み

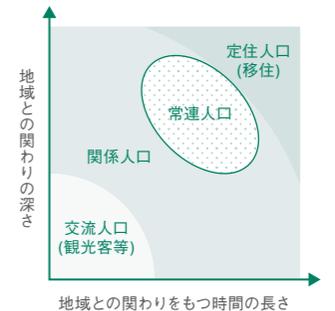


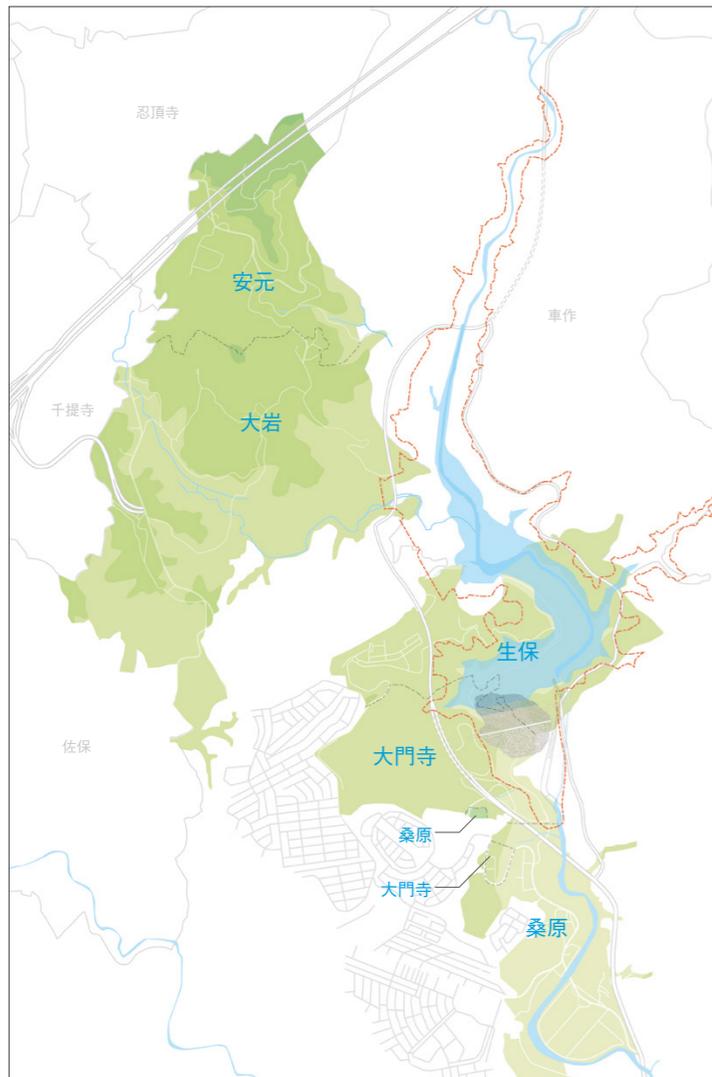
### つむぎあげる集落のストーリー。

地域資源や魅力、歴史や文化、環境、暮らしなどの情報を「集落カルテ」にまとめ、将来のまちづくりのポイントを読み解いていきます。さらに、地元の方々の想い・考えや市内外の人たちのアイデア、行政のミッションと重ね合わせて、地域の新たなまちづくりのストーリーを再編集し、ひいては新しい価値創出へとつなげていきます。

### 集落に「常連」という関わりを。

地域との関わりが密であり、地域の課題解決や地域資源の保全・活用に貢献できるような地域外の人々を戦略的に獲得していくことが集落の持続性を支える手段であると考えています。このような関係人口の中でも、より深く、より長く地域と関わりを持つ人を「常連人口」と定義し、その獲得を図るためのプランニングを行っていきます。





----- 安威川ダム事業区域



出典：国土地理院撮影の空中写真（昭和58年撮影）

旧石河村域の課題と資源を考える上で欠かせないのが、安威川ダムの存在です。安威川ではたびたび水害が発生していましたが、昭和42年7月の北摂豪雨で甚大な被害が出たことをきっかけに、大阪府によってダムの建設が計画されました。地理的条件などを踏まえた検討の結果、最適地とされたのが旧生保集落を中心とした地域です。ダムが完成すれば一帯はダム湖として水没するため、当初は計画に対する反対運動が行われていた時期もありました。その後、長い月日をかけて地元住民と行政との協議が重ねられ、最終的に生保集落の全戸、大門寺、車作、大岩、安威及び桑原集落の一部がそれぞれ住民の合意のもと移転対象に。すべての世帯の移転が完了したのは平成19年6月、ダム構想の立案から40年後のことでした。現在は、令和5年春の供用開始に向け、ダム本体や周辺道路の工事が進められています。完成後のダムは、100年に一度（時間雨量80ミリ程度）の大雨で想定される洪水から家屋や道路、鉄道等、市民の生活の基盤を守る役割を担います。

安威川ダム完成に向けて、大きく変わり続ける「旧石河村」の過去・現在・未来。

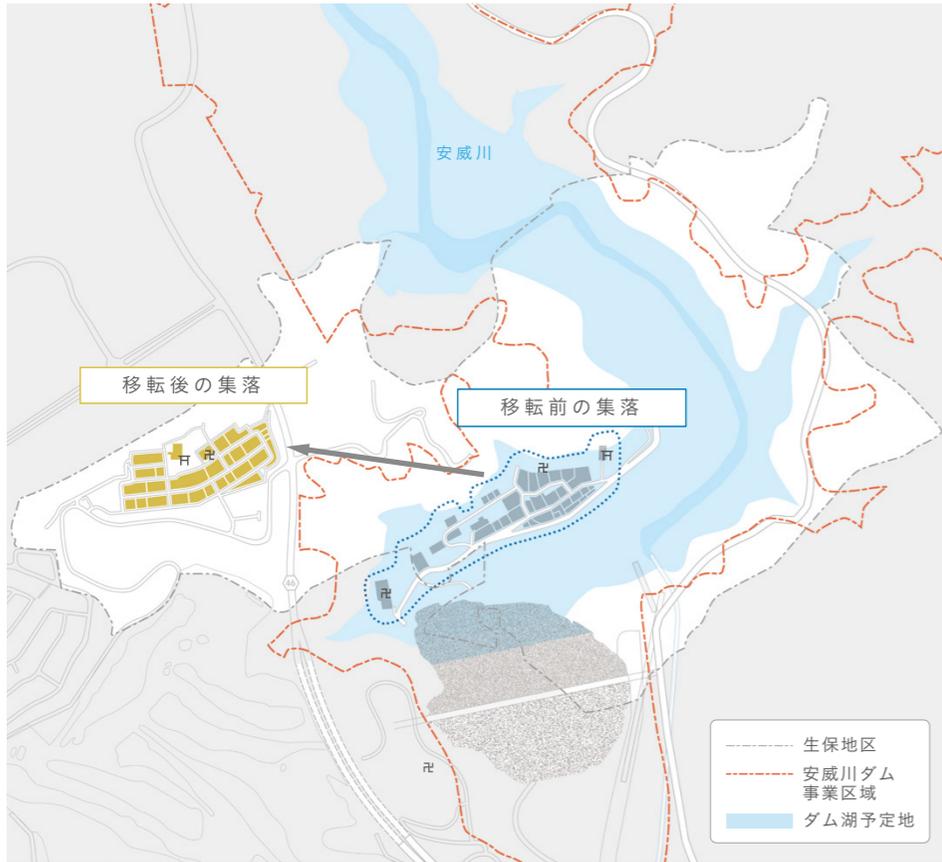
茨木市では、「ダム周辺の魅力向上と賑わいづくり」を目的とした、安威川ダム周辺整備事業を推進しています。

安威川ダムの特長は、何と言ってもまちからのアクセスの良さ。市の中心部から車で20～30分程度、近隣の地域からなら歩いて行けるほどの場所に立地しています。これほどまちに近い場所にあるダムは全国的にも稀な存在と言えるでしょう。また、新名神高速道路の茨木千提寺ICにも近く、他府県からの集客も期待できます。このことから、市では、北部地域「いばきた」の活性化と課題解決に向け、安威川ダム周辺を「山とまちをつなぐハブ拠点」として位置付けました。いばきたで活動する団体や施設、事業者と連携してダム周辺地域で魅力を発信し、そこで生まれた賑わいをいばきた全体へ波及させ、さらなる魅力を創り出していくことを目指し、整備を進めています。



山とまちをつなぐ「ハブ拠点」を目指して。

ダム周辺の魅力を向上させ、賑わいを創るため、市では「安威川ダム周辺整備事業」による整備に取り組んでいます。その特筆すべき点は、公園などの公共施設と公園の魅力を高める民間施設の両方を、民間事業者が設置・運営する官民連携の事業であること。公共施設と民間施設を設計から運営まで同じ事業者グループが行うことで、より使いやすく魅力的な空間づくりが可能となります。具体的には、令和5年度末の公園等の一部供用開始に向け、公共施設としては事務室や研修室を併設した拠点施設、多目的広場・園路・湖面水際の親水施設などの公園施設を、民間施設としてはダム湖兩岸を結ぶ吊り橋（人道橋）や飲食物販店などを整備していく予定です。さらに、茨木市、民間事業者、大阪府等が連携し、公園完成後も、地域のプロモーションやネットワークづくりなどの活動を推進します。

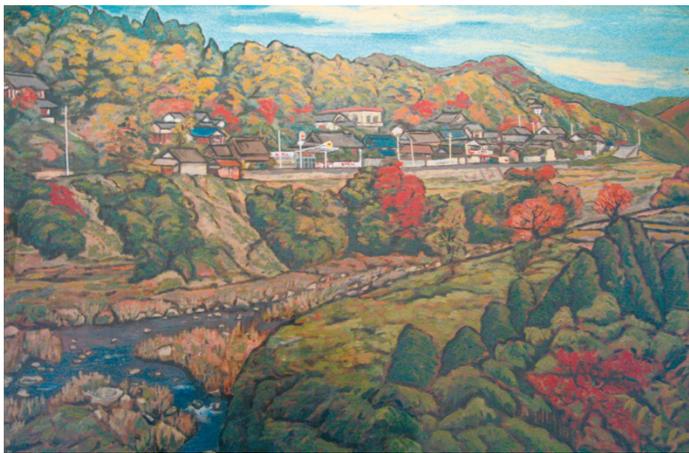


ダム湖となる集落を「全戸移転」、家並み、道、社寺に至るまで代替地へと再現させた。

「生保」は、安威川ダム建設工事に伴って、平成19年、住民の総意に基づき「全戸移転」を完了。家並みや道をはじめ、「諏訪神社」「浄土真宗本願寺派・正覚寺」といった社寺に至るまで、当時の集落を代替地に再現させることとなった。

安威川とともに暮らしたかつての「生保」には、豊かな自然に包まれた、里山の風景と人々の営みがあった。

安威川ダム建設工事以前の「生保」には、大きくカーブを描く安威川の右岸に沿って田畑が、その西側の旧茨木亀岡線を挟んで集落が広がり、豊かな自然に包まれた里山の風景と人々の営みがあった。



【かつての生保を描いた風景画】



【谷間に広がる田園風景と旧茨木亀岡線】



【恒例行事であった「生保フェスティバル」の様子】



# 生保

[しょうぼ]



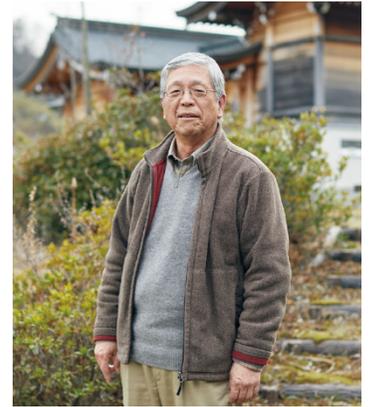
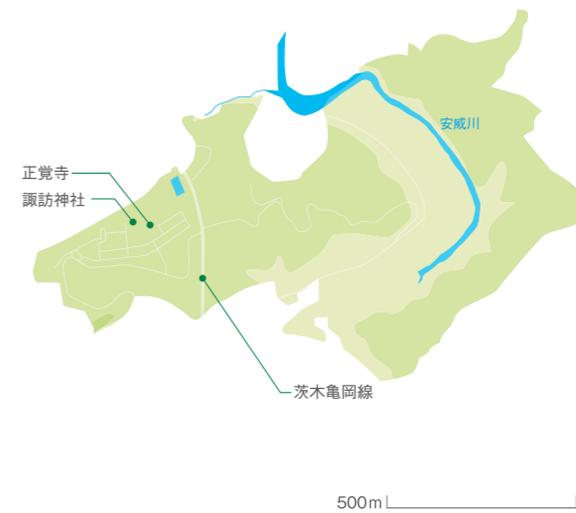
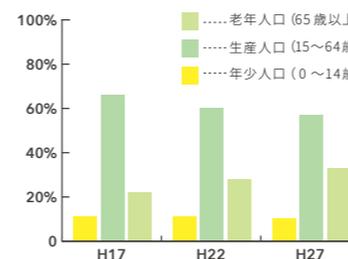
地域の大半が安威川ダムの開発地である「生保」は、刻々と変わり続ける。

地域の約3分の2が安威川ダム建設、および周辺整備事業の開発地。約3分の1が住宅地と圃場。茨木亀岡線を挟んで西と東に分かれている。生保は、安威川ダム建設に伴い、平成19年に「全戸移転」が完了した。世帯数は、明治時代とほぼ変わっていないが、「生保」の地名は、すでに1605年の「摂津国絵図」に登場しており、小規模ながら長い歴史を持つ地域である。

## ■ 集落の基本情報

人口	81人(男:44人、女:37人)
世帯数	33戸
面積	約0.7 km <sup>2</sup>

## ■ 年齢別人口割合の推移



生保自治会  
会長

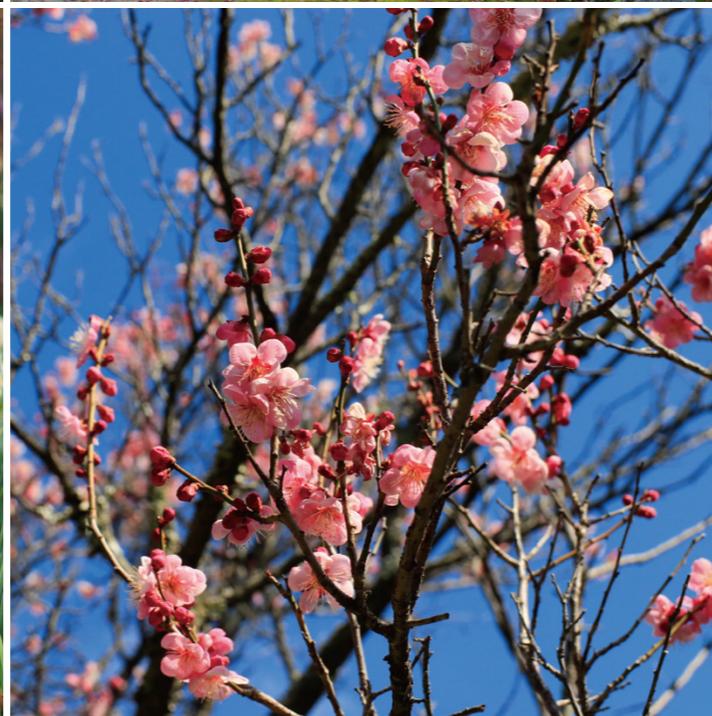
中野 幸男さん

全戸移転を決意した地域だからこそ、「安威川ダム」との共生を問い続ける。

生保は、安威川ダム建設事業に伴い、今から14年前に全戸移転を完了させました。計画当初より、長い歳月をかけて行政との交渉や協議を重ねた末に、最終的な地域の総意として、集落ごと現在の地に再現させるという案で合意に至りました。代々受け継いできた集落への想い、人と人との関係性など、コミュニティを存続させていくことが最も重要な命題であると思えた選択です。地区の大半がダム湖、および周辺の開発地にあたるので、課題といえば、「安威川ダム」ということとなります。果たして私たちが、数十年前に描いていた姿が実現するのだろうか。景観や環境は、どのように変化していくのか。都市部から人が集まってくることによる、さまざまな影響、あるいは交通状況への懸念など。当然ですが、地元住民だけでは解決できないスケールの課題が控えています。安威川ダム建設事業には、ハード面だけではなく、より良い地域づくりを担うソフト面での貢献に期待したい。令和4年春に完成するダム堤体、並びに周辺整備事業の進展を見届けるとともに、生保を次世代へとつなげていくための取組みを、行政と地域が一体となって進めていきたいと考えています。

中野 幸男(なかの さちお)

昭和24年生生まれ。平成27年4月から生保自治会長に就任し、現在に至る。



# 大門寺

[だいもんじ]



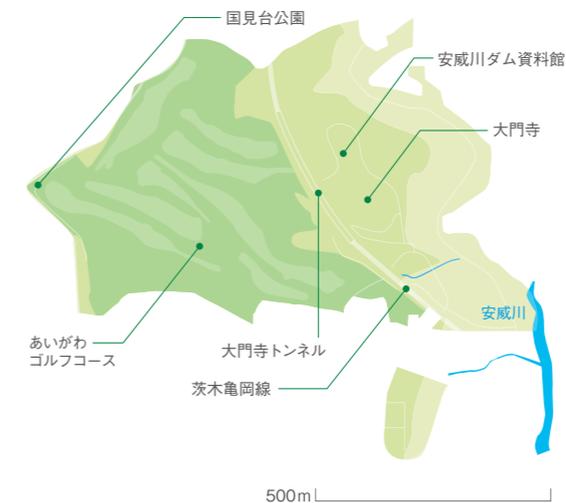
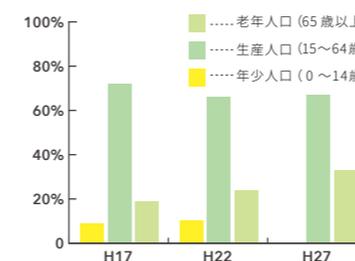
寺とダムが隣接する、全国でも稀有なロケーションとなる「大門寺」。

地名になっている「大門寺」は、宝亀2年(771年)開基とされる真言宗御室派の仏教寺院。本尊である如意輪観音坐像をはじめ、四天王立像が重要文化財に指定されている。庭園は、茨木市を代表する紅葉スポットとして知名度が高く、秋になると市内外の人たちが多く訪れる。東部では安威川ダム建設工事が進んでおり、完成すると寺に隣接することとなる。2021年3月現在、敷地内の高台は、安威川ダム展望広場として提供されている。

## 集落の基本情報

人口	24人(男:13人、女:11人)
世帯数	7戸
面積	約0.5 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



神峰山・大門寺  
住職

## 添野 智議さん

安威川ダム建設による自然環境の変化に対して、可能な限り「再生」への努力を続けていきたい。

大門寺は771年に開基され、1200年以上の歴史を有する真言宗御室派の仏教寺院です。茨木市北部の山合いに包まれ、静寂の中にひっそりと行み、檀家を持たない折袴寺として、地域の方々とともに存続してきました。安威川ダム建設の計画が立案された際、「大門寺は、この地を離れない」という決意をし、紆余曲折を経て、現在に至ります。結果、全国でも極めて稀有な「ダムに隣接した寺」へと生まれ変わることとなり、さまざまな角度から思考を巡らし、また、行政との協議を重ねながら、未来図を描き続けています。重要課題は、ダムという巨大な構造物と大門寺が最も大切にしてきた自然との共生。今でも交渉と提言を継続していますが、可能な限りダム周辺の自然環境を着工前の姿へと再生していただきたい。寺としても、市民のみなさんから愛していただいている美しい紅葉に加え、さらに四季折々の草花が咲き誇る庭園づくり、敷地内の環境整備を行っています。安威川ダムと大門寺を取り巻く一帯が豊かな自然と調和し、近隣地域の方々をはじめ、都市部から来られる人々にとっての「憩いの場」として親しんでいただく。そのための労を惜まず、全力で取り組んでいく覚悟です。

## 添野 智議(そへの ちじょう)

昭和18年栃木県生まれ。平成元年から平成12年まで茨木市文化財愛護会理事、平成元年から現在まで大阪府文化財愛護推進委員を務める。



# 桑原

[くわのはら]



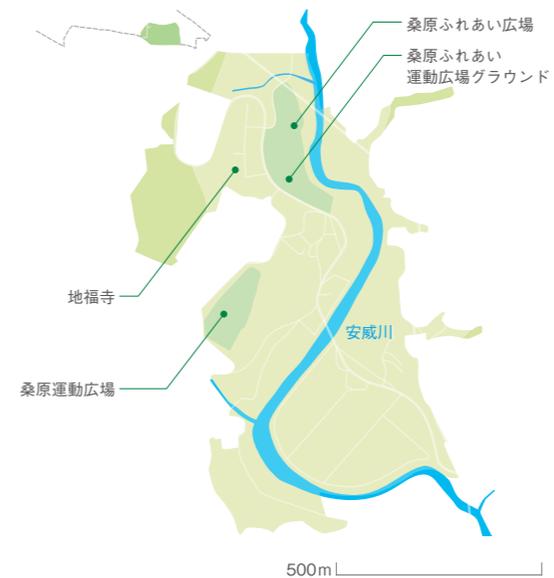
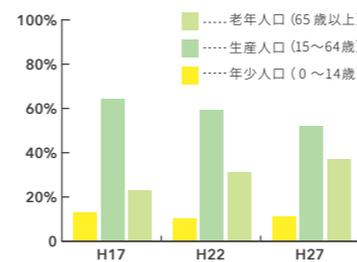
新しく完成するダムと地域に流れ込む昔ながらの安威川が共存する。

北から南にかけて安威川が流れる。北端は、安威川ダム堤体の下流部にあたり、周辺に新しく広場が設営される予定となっている。川沿いに南下すると、桑原ふれあい運動広場グラウンド、集落が続く。南西には、安威川ダム建設事業の残土処分地として貸与していた土地が圃場として返還されている。ダム建設事業に伴い、当時の全81世帯の内、13世帯と「地福寺」が北部の代替地等に移転した。

## 集落の基本情報

人口	223人(男:111人、女:112人)
世帯数	96戸
面積	約0.5 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



桑原自治会  
会長

田所 寿一さん

安威川ダムの玄関口となる地域を、どのように再編していくかが重要課題。

安威川ダム建設事業は、計画当初に治水・利水の多目的ダムを想定していましたが、平成21年に利水が撤廃され、治水ダムへと規模縮小されることになりました。桑原ふれあい運動広場グラウンドは、浄水場の予定地であった場所。また、ダム建設事業の残土処分地として貸与していた用地が圃場として返還。さらに、令和4年春にはダムの堤体が完成し、下流部には広場が整備されます。桑原は安威川ダムによって、大きな変遷を続けています。このような状況において、いかにして地域づくりを再編させていくかが最大の課題ですね。ロケーションとしては、市街地から安威川ダムへの玄関口。市内外の人々の動向や交通状況、それと呼应するように環境の変化も視野に入れなければなりません。さらに、桑原でも北部地域全体と同じく、少子高齢化や若年層の流出といった課題を抱えています。さまざまな角度から課題点を抽出し、地元地域ができること、行政にしかできないことを、しっかりと見極め、ビジョンを共有し、連携の体制づくりを行っていくことが重要です。市内外からダムを楽しみに来られる人々と地元で暮らす人たちがとが有意義に共存できる、新しく豊かな地域へと生まれ変わってほしいと思っています。

田所 寿一(たどころ じゅいち)

昭和23年桑原生まれ。平成24年NTTを退職し平成30年から桑原自治会長を務め、現在に至る。



# 大岩

[おおいわ]



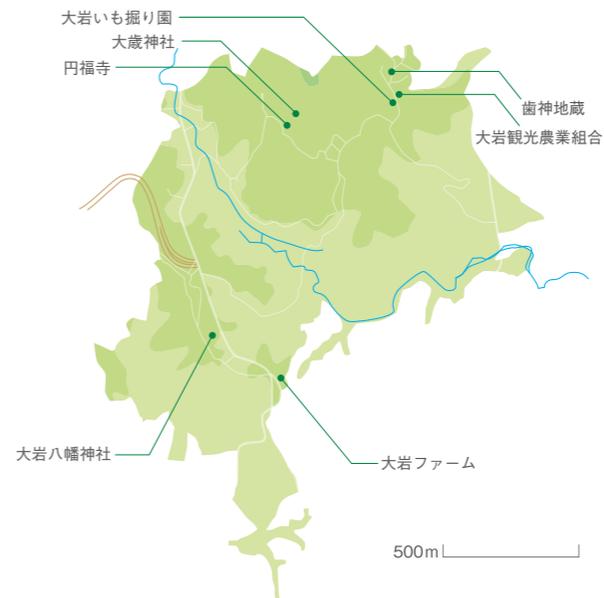
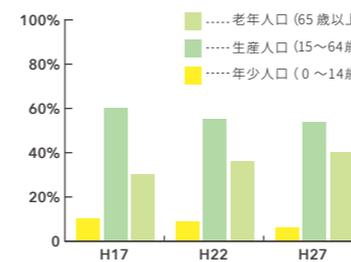
「大岩いも掘り園」をはじめとする地域資源を地元住民が一丸となって守り継ぐ。

中央部では、新名神高速道路・茨木千提寺ICと茨木亀岡線をつなぐ大岩線の建設工事が進行。また、安威川ダム建設事業の残土処分地として貸与していた南部の土地が令和3年に圃場として返還されるなど、地域の風景が大きく変化し続けている。地域資源としては、市内外から毎年多くの人たちが訪れる茨木市を代表するレクリエーションスポット「大岩いも掘り園」や、地域の恒例行事である「大岩太鼓巡行」がある。

## 集落の基本情報

人口	199人(男:93人、女:106人)
世帯数	75戸
面積	約1.5 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移



大岩自治会  
会長

大西 稔さん

伝統や文化を守り継ぐことができる、  
「持続可能な地域づくり」を実践していく。

大岩の地域資源としては、「大岩いも掘り園」「大岩太鼓巡行」などが挙げられます。おかげさまで、どちらも市内外の方々に広く認知され、多くの人たちに愛され続けています。しかし一方、少子高齢化、若年層の流出による担い手不足など、多岐にわたる課題も抱えています。さらに、安威川ダム建設に関して、事業用地として提供した土地が返ってきた時の姿と利活用について、これまで自治会をはじめ関係団体で十数年来協議してきました。長年の空白期間を経て高齢化と担い手不足が進行する中、いかに営農を持続することができるかを考えた結果、多くの方々の参加を得て「農事組合法人」を設立、地域の人々の手も借りて、この春、約15haのうち10haの圃場に田植えを行うことができました。これから先も、営農し続けていきたいと願っています。また、いも掘り園をはじめ、地域の行事や祭りを維持していくためには、基本的な姿勢を崩さず合理化を図りながら、伝統や文化を守り継いでいくための方法を模索しているところです。その上で、今後注目される安威川ダムや周辺整備事業に関わる多様な人々たちのネットワーク、行政との連携を視野に入れ、「持続可能な地域づくり」を実践していきたいと考えています。

大西 稔(おおにしみのる)

昭和30年大岩生まれ。平成28年、茨木市を定年退職すると同時に大岩自治会長を務め現在に至る。



# 安元

[やすもと]



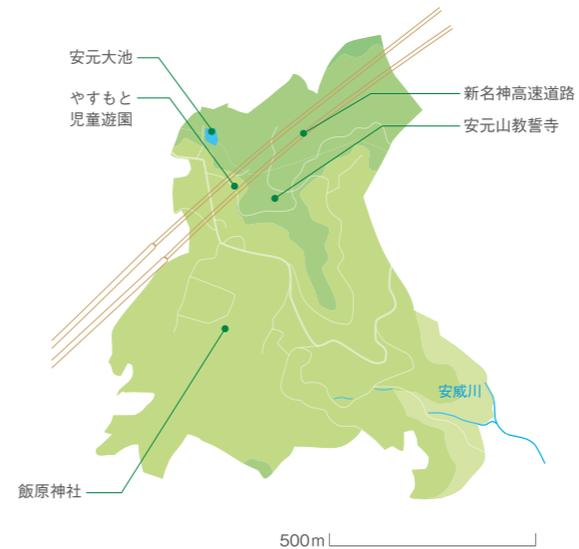
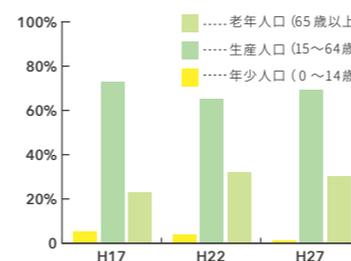
地域住民の「力」で、地域資源や魅力づくりを実践し、新たな価値創出を目指す。

竜王山の南斜面に位置し、北東部は山間地、北西から南東に流れる谷筋に沿って集落と耕地が開かれている。北西部には竜王山から流れる谷水を貯める大池がある。安元には、真宗大谷派の寺院「教誓寺」があり、第六代住職・藤波大超は、大正8年に千提寺地域が隠れキリシタンの里であることを発見し、日本のキリスト教信仰史を塗り替えた。茨木市立キリシタン遺物史料館の初代館長を務めた人物でもある。

## 集落の基本情報 (福祉施設入居者含む)

人口	212人(男:127人、女:85人)
世帯数	100戸
面積	約0.7 km <sup>2</sup>

## 年齢別人口割合の推移 (同上)



安元自治会  
会長

## 池上 克二さん

地域のオリジナリティを創出するために、次代を担う人たちの活躍に期待したい。

安元では、北部地域全体と同様に、少子高齢化や農林業の担い手不足といった深刻な課題を抱えています。加えて、地域の資源や魅力においても「これが安元のオリジナルと呼べるものが少ない。しかし、一方、それらの課題を乗り越え、解決に導いていこうと努力を惜しまない、次世代の方々や女性たちの存在、そのモチベーションと団結力には目を見張るものがあります。これらのマンパワーを、いかにして未来の地域づくりへとつなげていくことができるかが、私自身の命題であると捉えています。そのためには、地域内のコミュニケーション機会を増やし、みんなで楽しく、意見交換やアイデアを出し合える「自由な場」を提供すること。また、他地域や都市部の方々と積極的に交流を深めていくことが大切だと考えています。現在、安元では、地元で僅か一基だけ残る休眼中の「炭焼き窯」を復活させるという活動をスタートさせました。里山に古くから伝わる技術の継承と昨今のアウトドアレジャー需要を見据えて、里山整備、炭焼き、販売といった昔ながらの循環を再生させるという試みです。今後も、一歩ずつ着実に想いをカタチにしながら、特産品をはじめ、人が集まるコンテンツづくりに取り組み、安元のオリジナルを生み出していきたいですね。

池上 克二(いけがみ かつじ)  
昭和33年安元生まれ。平成28年安元自治会長に就任し、現在に至る。茨木市消防団石河分団副団長も務める。



(写真左から)

松本 邦彦(まつもとくにひこ)

1981年大阪府生まれ、茨木高校出身。大阪大学大学院工学研究科環境・エネルギー工学専攻博士後期課程修了。博士(工学)。2009年より株式会社スペースビジョン研究所勤務を経て、2013年より現職。研究分野は、景観保全、文化的景観の保存と活用に関する研究や歴史まちづくり。

正木 友希(まさき ゆき)

2008年茨木市入庁。文化振興や広報などの部署を経たのち、2020年度、地域づくりグループ長として北部整備推進課に配属。カメラと飲食物への興味関心を活かしていばきたの魅力発信に努める。

伊東 尚美(いとう なおみ)

2009年茨木市入庁。商工振興や教育委員会を経たのち、北部整備推進課へ。季節感あふれるいばきたの魅力を広く伝えるため、企画・立案に動む。

### 課題の本質を見極めるためのプロセス。

**正木** いばきたデザインプロジェクトの3年間を通じて「旧見山村」「旧清溪村」「旧石河村」いわゆる「山三」の15地域と対話を重ねてきました。全国の地方が等しく抱える、少子高齢化や若年層流出、担い手不足といった課題にあらためて直面したわけですが、もう一歩踏み込んだ、北部地域独自の課題抽出を行うことができたのではないかと実感しています。

**伊東** そのような状況に至った経緯、地理的な条件、人々の働き方や暮らし方など、多様なファクターを重ね合わせて、課題の本質を見極めていくためのプロセスが、この3年間であったと思います。

**松本** 地域を構造的に解釈するのは、とても重要ですね。課題の表層のみを捉えて議論をすると、どうしても一過性のアイデアフラッシュに終始してしまう。そうではなくて、地域が持っているポテンシャルを見極め、いかにして課題解決に活かしていくかという思考を原点にしなければなりません。

地元地域の方々との交流、  
他分野の人たちとの連携を深め、  
みんなと一緒に課題解決へ向かっていく。

大阪大学大学院 工学研究科  
環境エネルギー工学専攻

助教

松本 邦彦さん

茨木市都市整備部  
北部整備推進課

地域づくりグループ

正木 友希・伊東 尚美



**正木** 地元地域の方々へのヒアリング調査やフィールドワークは、その思考をするために必要な要素の収集であったわけですね。

**松本** はい。その地域に長く暮らしていると当たり前になってしまった風景や資源などを、他者の視点で捉え直してみると、とても魅力的に映ることがあります。さらに、地元の方々からお話を聞いていくことによって「想い」や「熱量」が伝わってくる。それらを再編集してフィードバックすることで、地域の独自性を生み出すことができると考えています。

**伊東** まず、自分たちの地域に自信と誇りが持てるようにすること。そのための手掛かりを積極的に提供していきたいですね。

**正木** こちらが知りたいこと、発信したいことが、地域の人たちにとっての「気づき」につながってくると嬉しい。

**松本** そうですね。地域の人たちと同じ目線に立って「気づき」を共感し合うことで、「一緒にトライしてみよう」という機運を生み出し、さらに実践的なステップに移行していく。そうすることで、地元の方々のコミュニケーション機会が増えたり、モチベーションの向上を促すことができるのではないのでしょうか。



### 培った経験と情報を「推進力」として活用する。

**正木** 3年間は、地域ごとのコミュニケーションに重点を置いてきましたが、今後は、培ってきた情報やネットワークを、北部地域全体で課題に向かっていく「推進力」として活用していきたいと考えています。

**伊東** ひとつの地域で得られた情報や活動が、実は他の地域と共通していたり、たくさんの地域が参画することで、よりダイナミックに展開できる取組みの可能性も見えてきました。

**松本** お膳立てされたものではなく、地域で自発的に湧き上がってくる想いや活動を可視化して、みんなが認識できるようにする。そして、地域間、あるいは市街地の人たちが混ざり合うことで相乗効果が生まれ、北部地域のオリジナリティが、より鮮明になってくると思います。一見ネガティブな課題においても、クリエイティブな視点で捉え直してみると「新しい価値創出」につながっていくのではないのでしょうか。

**伊東** はい。私たちも含めて、自分たちの地域を自分たちでつくっていく。それを楽しんでいることが大切ですね。

**正木** 今後も、「やらなければならないこと」ではなく「やりたいこと」として課題解決に取り組んでいきたいと思っています。

